

過去から未来へつなぐ想い 首里城復興STORY

一人ひとりの想いを集めて、
首里城復興へ



写真提供:首里城公園

首里城正殿は、2022年に本体工事着工、
2026年までに復元を目指して進められています。
その後、北殿や南殿等の復元に着手する計画となっています。



令和3年度首里城復興推進事業

【発行元】沖縄県（知事公室特命推進課）
【監修者】沖縄県立芸術大学 准教授 麻生 伸一
那覇市立嘉屋敷博物館 主任学芸員 倉成 多郎
一般社団法人沖縄美ら島財団
総合研究センター琉球文化財研究室 室長 幸喜 淳
沖縄県教育庁文化財課 主任 山田 浩世
琉球大学附属図書館 職員 前田 勇樹
【協力】沖縄県教育委員会・首里社地区まちづくり団体連絡協議会
【漫画作画】和々
【印刷・制作】ID BRAND



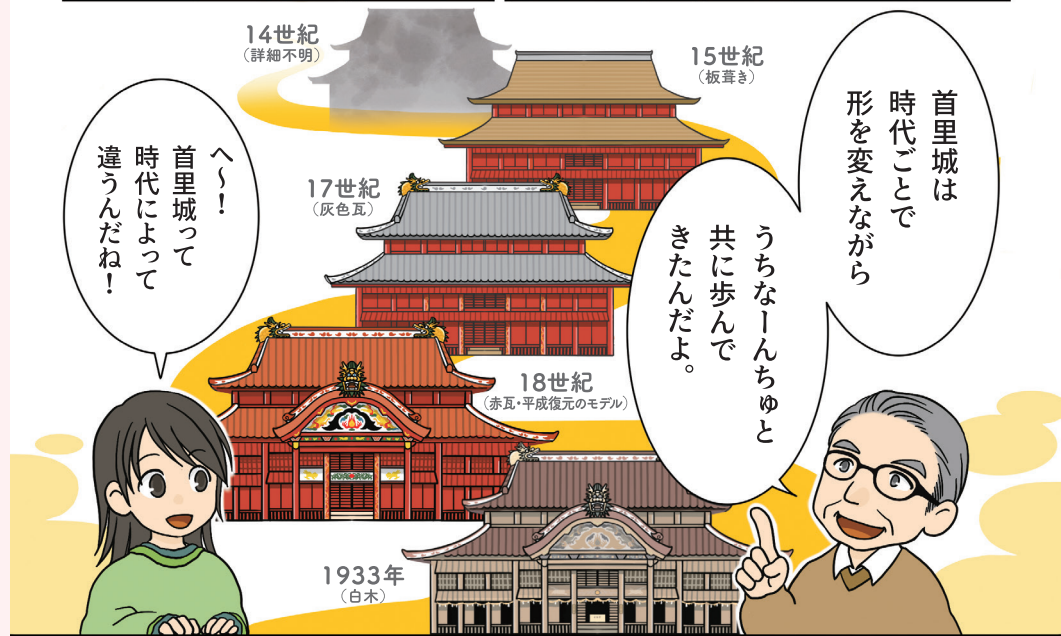
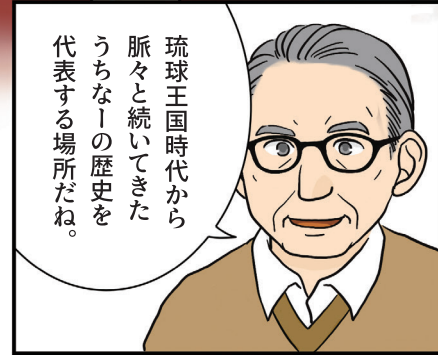
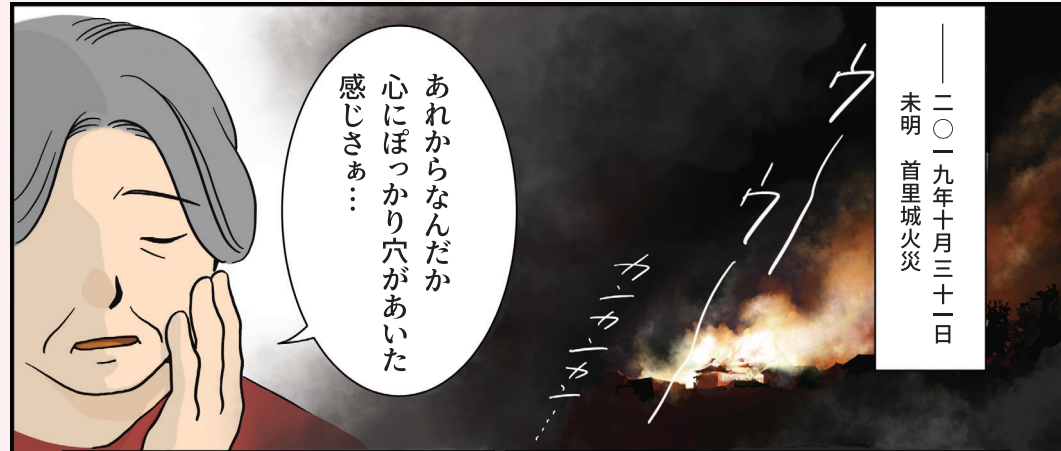
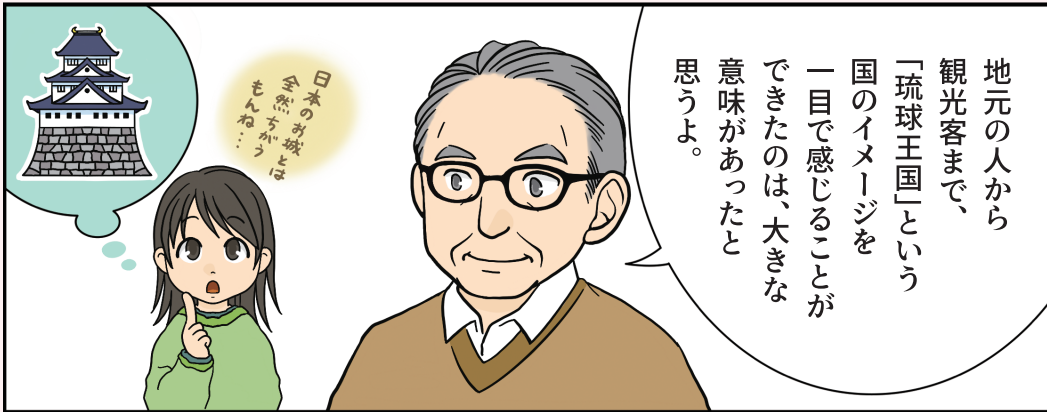
沖縄県特命推進課
公式 Twitter



沖縄県公式首里城復興サイト
首里城がつなぐ過去から未来へ
<https://www.shurijo-fukkou.jp/>



沖縄県公式
首里城復興サイト



歴史ポイント① 沖縄の歴史の象徴、首里城の変遷

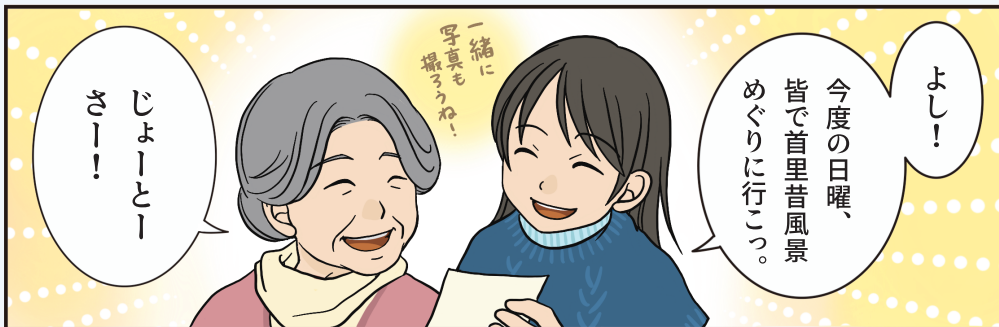


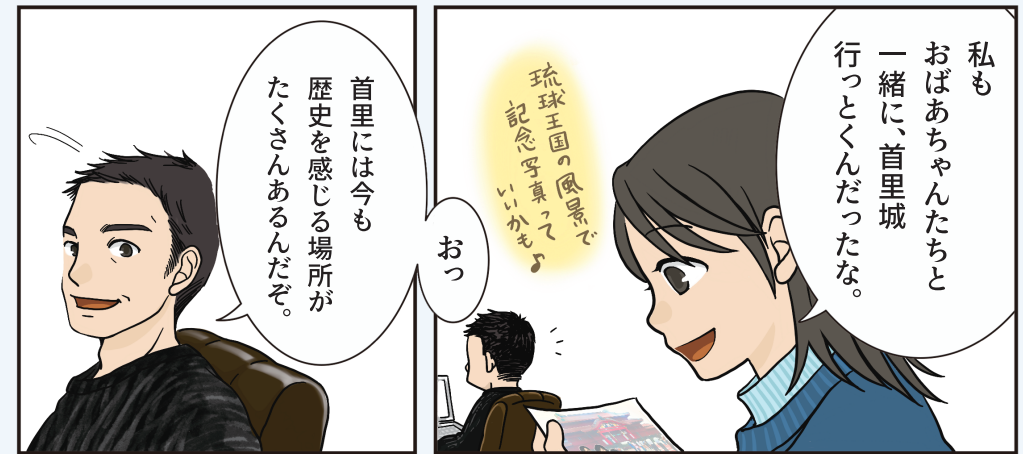
沖縄神社拝殿(写真提供:那覇市歴史博物館)


14世紀に築城されたとされる首里城は、王国時代には政治・外交・文化の中心として存在していました。1879年の「沖縄県」設置後には学校校舎などとして利用されます。1925年には正殿が「沖縄神社拝殿」として国宝に指定、1945年の沖縄戦で灰燼に帰しました。1950年には琉球大学が開学し、1972年の日本復帰後には首里城再建計画が本格化します。また、2000年には首里城跡が世界遺産に登録されました。時代ごとに変化する首里城は、琉球沖縄史の象徴的な存在ともいえます。

※色や形状は諸説あり

| | | | |
|--|---|---|---|
| <h3>中城御殿(なかぐしこうどん)</h3> | | <h3>龍潭通り</h3> | |
| <p>昔</p>  <p>戦前</p> | <p>今</p>  | <p>昔</p>  <p>1950年頃</p> | <p>今</p>  |
| <p>かつて、琉球国王世子(お世継ぎ)が暮らしていた邸宅。現在は跡地の発掘調査等が行われています。(龍潭の北側/旧県立博物館敷地)</p> | | <p>琉球王国時代、御殿(うどうん)や殿内(どうんち)が立ち並んでいた首里城下町のメインストリート。</p> | |
| <h3>中山門</h3> | | <h3>円覚寺</h3> | |
| <p>昔</p>  <p>1900年以前</p> | <p>今</p>  | <p>昔</p>  <p>戦前</p> | <p>今</p>  |
| <p>守礼門よりも先に建立された中山門は別名「下の綾門(あやじょう)」。1908年、老朽化を理由に撤去されました。(首里高校裏/県道50号線)</p> | | <p>1494年に建立された王国時代の琉球における臨濟宗の総本山。国宝にも指定されたが沖縄戦で破壊。現在は一部のみ復元されています。</p> | |





| | |
|--|---|
| <p>首里の昔と今を見比べてみるかい?</p>  | <h3>守礼門</h3> |
| <p>昔</p>  <p>戦前</p> | <p>今</p>  |
| <p>16世紀に創建された守礼門。冊封使(さっぽうし)*の滞在時には「琉球は礼節を重んずる国である」という意味をもつ扁額(へんがく)「守禮之邦(しゅれいのくに)」が掲げられていました。沖縄戦で焼失したものの、1958年に復元されました。 * 琉球国王を任命するために中国皇帝が琉球に派遣した使者。</p> | |

歴史ポイント② 沖縄戦における首里城と首里のまち



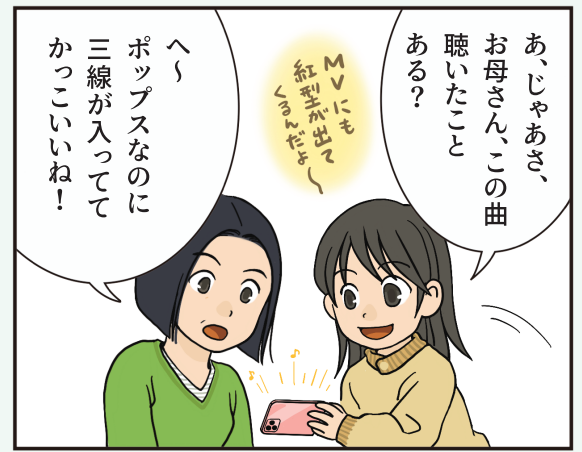
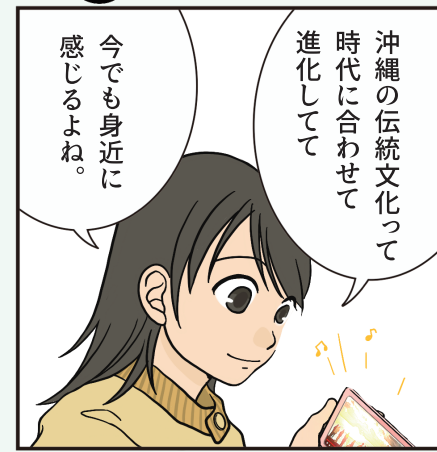
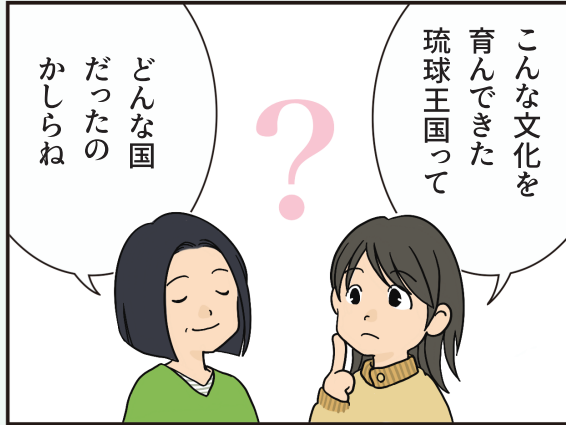
破壊された首里城(写真提供:沖縄県公文書館所蔵)

第二次世界大戦末期の1945年に激しい地上戦が繰り広げられ、多くの人命が失われた沖縄戦。沖縄戦では、沖縄の文化財もまた大きな被害を受けました。戦後、アメリカの統治下にあった沖縄では、かろうじて残された文化財の収集や復元が計画され、守礼門の復元などが実現しました。そして、1972年の日本復帰後、首里城復興の気運が高まり、復興への歩みを一歩ずつ進めることとなります。

首里城公園内及び首里のまちでは、現在もなお戦争の痕跡を辿ることが出来ます。沖縄戦における激しい戦闘の中、現在の首里城公園の地下に構築された南北約1km以上にも及ぶ「第32軍司令部壕」もその一つです。「第32軍司令部壕」は、2019年の首里城焼失後、改めてその歴史的価値が見直され、現在、保存や公開を目指した議論がはじまっています。



戦跡/第32軍司令部壕入口(写真提供:那覇市歴史博物館)



👆 歴史ポイント④

王国の繁栄を刻む「万国津梁の鐘」

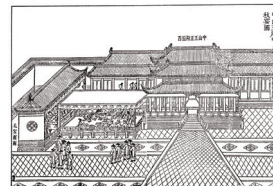


写真提供: 沖縄県立博物館・美術館

「大交易時代」の活況と海洋国家としての首里王府の誇りが「万国津梁の鐘(旧首里城正殿鐘)」に込められています。鐘には「琉球国は南の海の良いところにあり、中国と日本の間にある蓬莱の島で、船で万国の津梁(架け橋)となって貿易を行い、国に宝物が満ちている」という内容の銘文が刻まれ、王国の繁栄を想像することができます。「万国津梁の鐘」は、現在、沖縄県立博物館・美術館に展示されています。

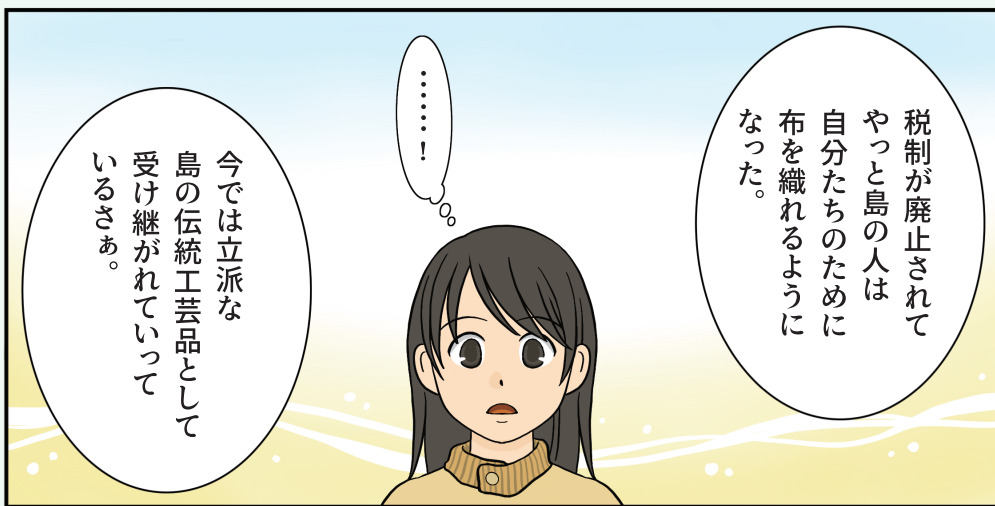
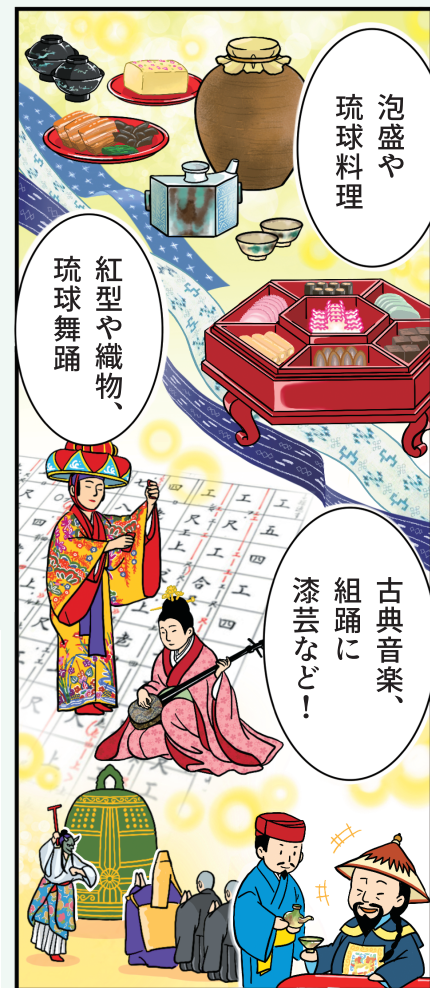
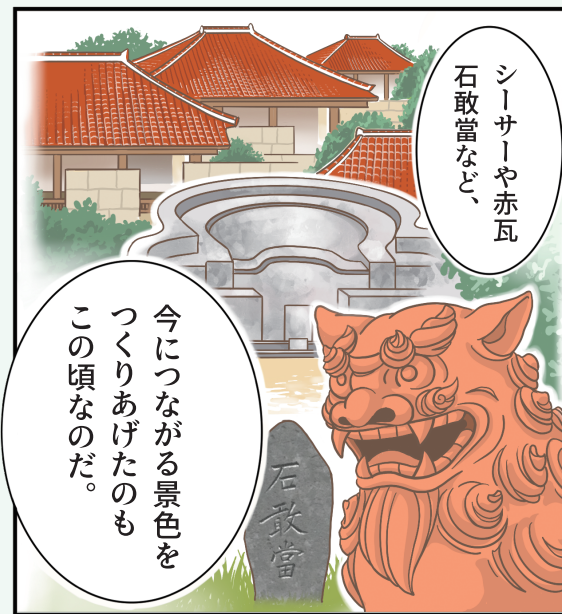
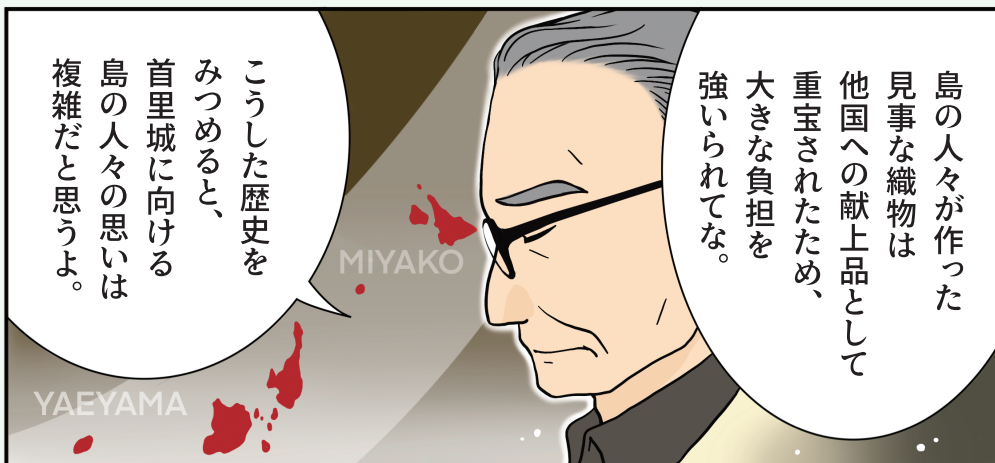
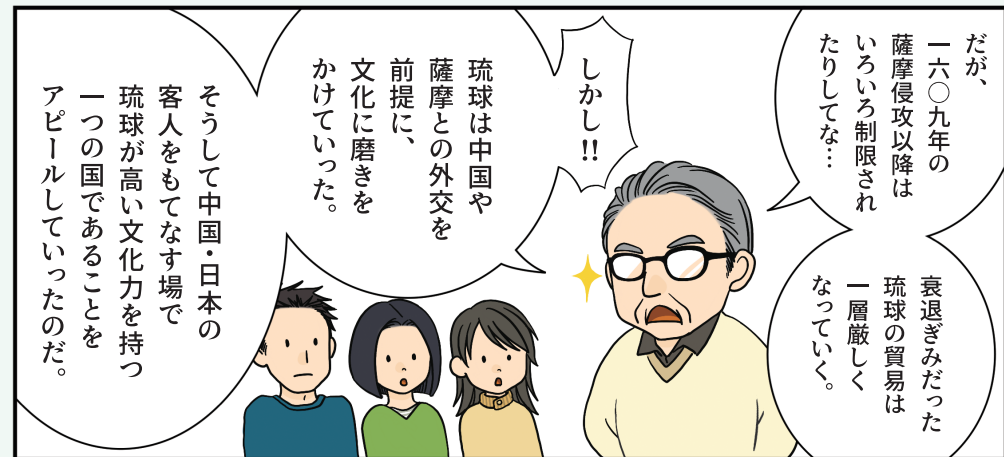
👆 歴史ポイント③

歴史がつなぐ、沖縄の伝統文化



近世の琉球では、冊封使(さっぽうし)や薩摩役人を歓待する際に「琉球らしさ」を演出するため、組踊に代表される宮廷芸能が花開きました。また、漆器や焼き物(やちむん)、紅型といった工芸に加え、泡盛や菓子などの食文化も近世期に大きく展開します。これらは現在の沖縄を代表する伝統芸能・伝統文化として継承されています。

写真提供: 那覇市歴史博物館所蔵



首里城復元へむけて、未来に継がれる技術と資材

瓦 首里城に用いられる「瓦」の歴史と変遷

沖縄の青空に映える首里城の赤瓦。その姿は多くの人々が共有する首里城のイメージであり、非常に印象的な美しさです。しかし、かつて首里城は「板葺き」でした。1660年に火事で焼失した首里城を再建する際に「瓦葺き」へと移行しましたが、当時の瓦は赤色ではなく灰色でした。また18～19世紀頃の正殿の屋根は灰色の瓦と赤色の瓦が混在した状態だったと言われています。現在、関係機関によって伝統的な製造技術を継ぐ活動も行われており、今回の復興でも赤瓦は大きな存在感を示すことでしょう。



「赤瓦」は歴史の変遷を経て沖縄の風景の一部となった／大嶺政寛《八重山風景》1970年 沖縄県立博物館・美術館所蔵



かつて正殿屋根の瓦は灰色だった

写真提供：沖縄県立埋蔵文化財センター所蔵



現在はプレス成形が主流だが、伝統的な技術の継承も着実に進んでいる

写真提供：(一財)沖縄美ら島財団



正殿2階内部の御差床(うさすか)
写真提供：首里城公園



2006年から2010年にかけて、正殿外壁の漆再塗装が行われた様子

漆 首里城における「漆」の歴史的背景と未来

「首里城正殿は巨大な琉球漆器である」と言われるように、正殿には琉球王国の漆芸における技術の粋が集められました。黒漆塗り、桐油ベンガラ塗りや沈金加飾をはじめ、漆芸の多彩な技法が用いられた正殿は、王権を象徴するのにふさわしく荘厳な空気を纏っていたことなのでしょう。今回の正殿復元における見所の一つとなるのが、正殿二階にある「御差床(うさすか)」と扁額における漆塗装です。古文書などの新たな史料に基づいた復元により、皆さんが知っているこれまでの印象が大きく変化する可能性があります。漆芸は首里城を象徴する匠の技術の一つ。どのように復元されるのか、ぜひ注目してみてください。

木材 首里城の基盤をつくる「木材」

今回の首里城復興においては、その一部において県産のオキナワウラジロガシやイヌマキ(チャーギ)を活用していく方針です。また、首里城公園の質的充実と愛護、育成の諸事業を実施する「首里城公園友の会」では、1993年より将来の修復を見据え国頭村にてイヌマキの育樹活動を実施してきました。そこには未来の首里城へむけた思いが込められています。その国頭村には琉球王国時代、首里城のために山々から建築用の木材を伐(き)り出し、献上した歴史があり、労働歌である「国頭(くんじゃん)さばくい」は現代にも受け継がれています。



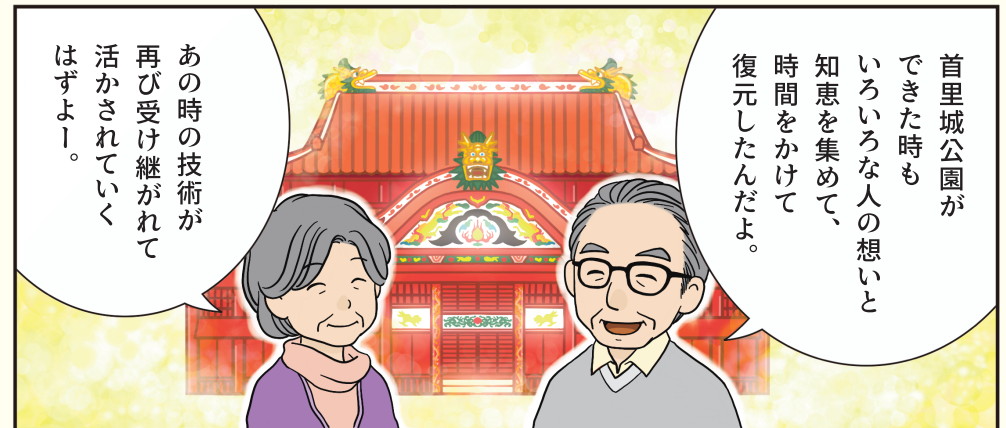
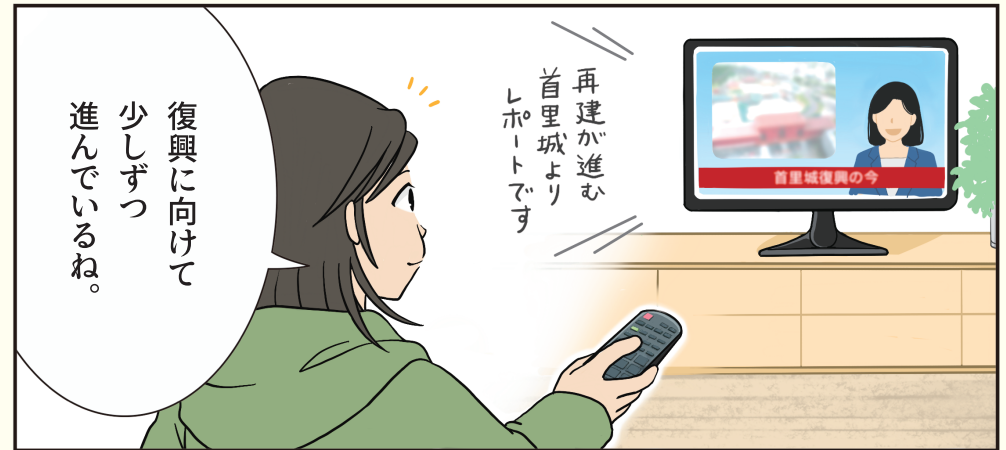
国頭村内のオキナワウラジロガシ



伐採後の苗木植栽



国頭さばくい(イメージ)





世界各国には
沖縄から移住した
人がたくさんいて、

彼らのなかには、
今でもルーツである
沖縄を大切にしている
人々もいるんだ。



特別な想いを
抱いているのは
沖縄に住んでいる
私たちだけではないよ。

あ、先生。



国境を越え、

世代を問わず、

彼らからも
首里城復興を
願って、多くの
寄付やメールが
集まったんだ。



首里城は多くの人と
つながっているんだ。
一人ひとりの
首里城への想い、
皆で共有できると
いいな。

よし!!
私たちが
首里城復興のために
できることを
考えてみよう!



ねえねえ、
これ知ってる?

わく
首里城復興のために
こんな活動をしている
高校生があるんだ!

首里城を愛する「首里城を愛する高校生たち」による募金活動

一人の高校生(2019年当時)が、首里城の焼失に衝撃を受け、「ただ“やばい”で終わらせるんじゃなく、自分にできることがあるはず」という思いで、Instagramで街頭募金を呼び掛けたことからスタートした「首里城を愛する高校生たち」の活動。投稿がシェアされると、共感の輪が広がり、学校や学年を超えて多くの高校生が自主的に募金活動に加わるようになりました。その活動は大きな注目を集め、ニュースにも取り上げられています。



日本全国からも
沢山の寄付金が
集まったんだって!

興南高校 アクト部 ~未来へつなぐ首里城への思い~
興南高校のユニークな取り組み

興南高校の「アクト部」では、以前より部活動の一環として修学旅行生に首里城の魅力を伝えるガイドを実施していましたが、焼失でその機会を失いました。部員たちの「いまこそ、首里城のためにできることを」という前向きな思いにより、現在は「首里城VR(仮想現実)ガイド」を実施。現地の空気を感じながらVRを用いた首里城ガイドが注目を集めています。参加した修学旅行生からは「復興したら絶対に本物を見に来たい」という声もあり、「未来の首里城」への期待が寄せられています。また、同部には熊本県のお寺フェス実行委員会からの支援金や熊本地震を経験した子どもたちの応援絵画が寄せられており、首里城を通じた若い世代間でのつながりが生まれています。



俺ら世代にだって
首里城って特別な
存在だったんだな。

へえ

なになに?

今の首里を体感しよう!

首里城 周辺 MAP と 歴史トリビア



1 「龍潭(りゅうたん)」は人工の池だった。
 首里城北側の「龍潭」は自然にできたものではなく、景勝地をつくるために15世紀に掘られた人工の池なんだ。作られた当時は、龍潭のまわりに木や花が植えられたそうだよ。冊封使が訪れた際は、爬龍船競漕(ハーリー)が行われていたんだって!

2 削られた文字に歴史あり。「泰山石敢當(たいざんいしがんとう)」
 当蔵町にある「泰山石敢當」はとても立派。でもなぜか「泰山」の部分だけが削り取られている。尚泰王の時代、中国では貴人の名を民間で使用しなかったため、冊封使に「泰山」の字を咎められるかも…と案じた王府の役人が削らせたといわれているよ。

3 泡盛造りと関係の深い「首里三箇(しゅりさんか)」
 琉球王国時代、泡盛は嗜好品だけでなく、儀礼や外交の場で重要な役割を果たしたよ。この泡盛は、「首里三箇」と呼ばれる鳥堀・赤田・崎山の特産品だった。首里には現在でも酒造所があるよ。

4 かつて首里のまちには馬場があった
 現在の崎山町には、馬場があり、東西約200mにも延びる道路では乗馬訓練が行われていたよ。馬場と周辺の美しい風景は「崎山竹籬(さきやまぢり)」として「首里八景」にも詠われている。龍潭ほとりには松崎馬場もあったよ。

5 「上り口説」にも登場する由緒ある寺院が創建された理由とは?
 尚寧王の時代、薩摩に人質として連れて行かれた王子が無事帰国したことを受けて建てられたのが「首里観音堂」。旅の安全や航海の無事を祈願する様子が「上り口説」にも歌われるよ。

近い将来、首里城はまた必ず復興するよ。その時は家族みんなで、首里城に行こうねえ!

首里城を知ることで、沖縄の歴史や文化に興味が出てきたね!

7 首里城の東西の端にある「アザナ」は何を意味する?
 首里城城郭の両端にあるのが「東(あがり)のアザナ」と「西(いり)のアザナ」。これって一体なに? 実は「アザナ」とは、物見台のことを指す言葉。その名の通り、城郭のエッジからは城内や那覇の町を一望できるよ。

6 首里城の「湧き水」は冊封使からも大好評だった!?
 首里城内、瑞泉門近くにある湧き水「龍樋(りゅうひ)」は、冊封使(さっぽうし)に提供された特別な水だよ。その素晴らしさを冊封使が称えて題字などにしたものを石碑にしたのが「冊封七碑」。龍樋は現在もお水が湧き続けているんだ。

